【大東出版センター『評　点』、1970 年 6 月号、pp.84 ～ 97　を復刻】

ことばと武器との対抗

チェコスロバキア　――　一九六八年

平　野　秀　秋（法政大学助教授）

（一）

チェコ作家の手紙 ――

「拝啓――七ヶ月間のあいだチェコスロバキアで、私たちは希望に生きていたのです。当初は変革を行った人々でさえも、この国がこの二十年間苦しんできた罪と過ちの恐るべき重荷に気がつかないように見えましたし、今もなお、気づいていいないかのように思えます。

次いで、信じられないことが起りました。すなわち、とうてい変えることができないと思われた無関心から醒めた人々が、それまではほんの一握りの知識人たちのみのものであった、鋭い現状認識を示したのです。……久しぶりでこの国は、この国の政府を恥じる必要がなくなったのでした。新しい、今までチェコスロバキアの歴史上、ほんの一度か二度しか経験されたことのない種類の統一が生まれました。

過去の重荷は（依然として）存在したものの、古い借りを支払う必要はありませんでした。私たちは政治的な過失を、それを犯した人々と一緒にやっつける古いやり方は捨てました。裁判もありませんでしたし、私たちがときに辛らつな論争で用いる唯一の武器は、書くか話すかされる言葉だけだったのです。……」（「ザ・ガーディアン」1968/08/24　※）

（二）

八月二０日深夜、チェコ国境を越えたソ連軍（ワルシャワ条約機構軍）戦車は、チェコの心臓であるプラハ市へ向かって疾駆した。六七年秋にはじまったこの国にとっての、そして象徴的意味ではまちがいなく今世紀後半の世界にとっての、ある劇的事件に電撃的な結末をもたらすために。解き放たれた戦車群の疾走、およそ政治権力の政治権力たる生理に突き動かされ、それを惜しげもなく披瀝したこの鋼鉄群の疾走が開始された瞬間に、あたかも周囲五カ国の旺盛な圧力のためとでもいうように東西に長くつぶされたこの小国の都市は、全く問題にならぬほど薄弱な皮膚によってしかおおわれていなかった直ちに明らかになったにちがいない。とはいえ、この事件――チェコ事件は、この電撃作戦によって必ずしも一気に結末に達したわけではなかった。体内に鋼鉄を食い込ませたままでチェコは、ほぼその年の暮までを全力でこの異物に抗い、叫んだ。つまり、ここでも武器はことばであったし、ほとんどことばだけだったのである。しかし、この四ヶ月が、ノボトニー解任、行動綱領、二千語宣言といったそれ以前の経過に冷淡であった世界が、チェコ事件に反応することをはじめて自らに許した期間であった。現代は、むしろ無関心の故ではなく、それ以上にある種の原則や概念に故に事件に反応するためには刺しつらぬかれたものの言葉を、あたかも必要とするかのようであった。言葉が消えてからもまたさらに一年間、チェコはまだそれとわかる生体反応を外部へ発信してきた。それが、結局は次第に弱まり、遂に死にいたる反応であったとするならば、今年一月になって伝えられたチェコ党、政府人事の大異動の報道は、おそらく死そのものの告知であったといってもまちがいはないだろう。

問題のチェコ事件は終わった。たとえこの国で、それともいわゆるソ連・東欧五カ国の側で、今後類似した事件がふたたび起こりえようとも。したがって、今さしあたって我々に残されているのは、事件そのものである。そしてこのようにして残された事件そのものについていうならば、それがこちら側に惹起させる反応、あるいは正確にいうならば、その事件が「こちら側」に惹起させずにはおかない反応は、一つには事件そのものの原因、経過、結果を死後解剖学的正確さでたしかめたいという衝動であるか、もう一つには、この事件が、現代史にしばしば意に反してかかわさせられるこ

んにちの人間に暗示する劇的性格とはなんであるのか、といういわば事件の意味論への衝動であるか、の二つである。

（三）

事件経過の情報は、現地および五カ国の双方における、「ワルシャワ条約機構的」友好と「社会主義的」信義に裏付けられていたにちがいない検閲から生き残りえた限りでは、ほとんどあますところなく伝えられた。しかし依然として、たとえばつぎのような核心的部分は推測することしかできない。

六七年の生誕祭（クリスマス）をはさんだノボトニー解任劇の詳細。（これについては、その外郭だけはフランスの「les temps modernes（現代）」誌六八年四月号に寄せられたイャナカキスの論考がよく伝えている。この解任劇の特筆すべき点は、かれによれば、およそ社会主義国の従来の党・政府首脳人事における秘儀的特色というべき幹部会秘密会議における隠密裡の事前決定、中央委員会総会の追認、公表という手続きがはじめて破れ、秘密裡の決定が不能のまま総会にもちこまれたこと、および同年秋プラハを訪れたブレジネフが、ノボトニー派とドプチェク派の双方に支持を与えることなく帰国したこと、したがって、これまた東欧の党・政府首脳人事に恒例のソ連の事前干渉ないし諒解がこの時に限り不可能であったこと、である。そうとするならば、ドプチェク政権は、すでにその出生の経緯から異端の色彩をおびている。）

六八年七月末からのチェルナ、ブラチスラバ両会議の真相、およびこれらの会談から一七日後の武力介入までを頂点とするにちがいないクレムリンの内紛。（条約機構軍の合同演習という背景下でおこなあわれた会談後の共同宣言は、チェコの軍事面でのソ連への協力とソ連の経済面でのチェコ支援を交換する内容であり、問題の自由化政策については沈黙していた。会談は、もし宣言の主旨が実際に履行されるならば経済面でも政治的波及効果の面でも、ソ連が自国の改革に拍車をかけなければならないという意味で、どのみちクレムリン自身にとっても選択であったのだ。いやむしろ、ここ会談前後では、ソ連および五カ国の内部事情こそが主役であったという見方ができる。内紛はなかったと考える方がむつかしい。）

モスクワ会談の真相。（武力介入を効果的に正当化するためには、即刻にもかいらい政権を作り上げねばならない。だがそれはできずに、ドプチェクは結局翌年四月まで政権を維持して「一月改革路線はすてない」と、もはや実現の可能性はなかったにせよ、言い続けた。その分岐点となったのは、ドプチェクら四首脳の逮捕、モスクワ連行から一転して「会談」となったこの一幕である。しかしこの時、チェコ国内は一月路線とその推進者にたいする支持と、同時にそれに比例するかのように、事態の推移を反映した同じ推進者にたいする疑信と焦燥とが空前の高まりをみせた。この時は、決断をせまられたのはチェコの側であったかもしれない。一月以降の改革の推進力となった言論・報道機関の占領に代って、各地の地下放送が重要な政治機能を果たしたのもこの期間である。）

最後に、武力介入に関する米ソの事前諒解の有無。（「NATO 諸国と同参謀本部は、八月一四日以来チェコ侵入を知っていた。ただ、その日時については九月一日以前とするだけではっきりしなかった。」――西独ディ・ヴェルト紙、八・二三。いずれにせよしかし、事前諒解ありとすることは当然すぎる推理であろう。武力介入とナチスの近隣小国への侵略とを重ね合わせることは、心理的には全く理由のある連想である。しかしそれが、全面戦争を誘発しえたかどうかという点からみれば、この二つを類比させることは、国際政治の状況判断の上で全く適当でない。チェコ事件は、現代の主権国家の圧倒的に巨大で瞬時に奏効する――核に象徴される――軍事力の戦慄させる均衡のポケットのなかでおこらざるをえなかった事件である。あえて言えば中国でさえ、紛争のある中ソ国境においてこの瞬間を利して牽制の行動を起こす危険をおかさなかったのは、中国がソ連、チェコ両国を共に現代修正主義と非難する公式的立場のせいだけではなかったにちがいない。そして、すこし進めていうならば、このような国際的状況の特質こそが、チェコ事件における、終始ことばと武器との対決であったという、ひとつのユニークさをきわだたせることになったのである。とはいえ、米ソの事前諒解の有無、あるいはその内容という核心もまた、これこそは最も知れることのない核大国間の軍事・外交上の秘密である。）

事件の死後解剖学への、本来からして不快なものであるところの衝動にたいして、かろうじて釣り合ってくれることができるのは、以上のような核心を我々が知ること、

現代の巨大でグロテスクな政治世界における権力の内幕を知ることによっていささか嘲笑することができることであろう。しかしそれが十全に果たされない以上、量り残された不快は、そのまま事件の意味論へともちこされることになるのである。

（四）

チェコ駐留のソビエト兵士の手紙――　※

「ニーナ、ボクたちが深い森のなかにいて、ほとんど眠れないでいることを想像してほしい。何もかも背のうのなかにしまいこまれており、士官の許可がないと、ほどいてはいけないのだ。だからボクは、アルバムにも手をふれることができない。」

「やあトニーチェカ

まず最初にボクは君の手紙を、ちょうど警報が鳴っている最中に受け取ったこと、そしていまボクは、車のハンドルの上でこの返事を書いていることを伝えなきゃいけない。……グレチコ元帥が今週ボクたちのところへやってきて、われわれがなぜ、そしてどんな風にして、いまのようななったのかを説明してくれた。その前からボクたちにも少しは分かっていたのだけれどもこれで万事がハッキリと呑みこめた。

ボクたちがどれほど苦しい義務を果たさなければならないのか、トーニャ、君に分かってもらえたらなあ！

いままでボクは、君にいつも万事順調だと書いてきたけれど、実際はそうじゃないんだ。しかしそのことを書くのはむずかしいので、あとで君に会ったときに話そう。あとで。

ボクたちは、チェコスロバキアの国境から十五キロ内部へ入ったところにおり、どんどん中に進んでいる。除隊の話は一切ない。映画を二本見せてもらった。『薄氷』と『第十三』というんだ。

この手紙を書いたら、開封されてしまった。この次からは、開封されないように全力をあげるつもりだ。」

自由コシツェ放送、八月二六日発信――　※

「コシツェ付近で、反ソ・デモに戦車を乗り入れよ、との命令を拒否したソ連運転兵が射殺された。」

（五）

疾走する鋼鉄群は、またその上にも、引裂かれ、あるいは刺しつらぬかれる魂と肉体とを乗せていたのだ。

事件の意味とは、なに照らしたとき、どんな基準からみたとき、計ることができるのか。真にあるべき社会主義とはなにか、という基準に照らして？チェコ国外における、ありとあらゆる左翼がそれをおこなった。ソ連、四カ国、中国、ルーマニア、アルバニア、キューバ、またイタリア、フランス、日本におけるそれらが。さらにまた既成左翼と新左翼とが。そしてその結果、この同じ概念によって計量されたこの事件の意味は、どれ一つとして正確に同じでない。それを社会主義の多元化と呼ぶのであろうか。だとするならば、ソ連はともかく三年という年月を要したとはいえ、事件の息の根を止めることによって、見事にそれに一矢むくいることが可能であることを証明したのだ。こうして同じ概念によって計量された意味が、それぞれ仮説的にのみならず物理的にも敵対的であるのは、いかなる理由によるのか。ものであれ、でき事であれ、言葉であれ、たとえばかつての西欧社会に対するキリスト教がそうであったような、それらの意味をになうものから共通の意味をつかみ出すためのささえとなる文脈が、ばらばらにくずれたこと、そしてそのことによって意味をになうものと、そこから一たん剥離された意味との関係を意識して吟味しなければならないこと、を象徴するためにつくられた意味論という語をわれわれが必要とするのは、こうした事情からである。

一方、そうした事情にもかかわらず、現代社会の人間達が一種壮大な一神教的世界のなかに生きていることもまた、反面のまぎれもない事実であるらしい。もしかするとサルトルは、こうしたいみをもこめて「マルクス主義は、今世紀ののりこえ不能な哲学である」という認識を書きしるしたのであるかもしれない。この一神教的現実にふれるためには、党が政治と、経済と文化とを、また哲学と、科学と、倫理学とを、そ

れらのあらゆる価値を一身に統一して君臨している東の殿堂に現実に詣でることを必ずしも必要としない。たとえばこの事件に即していうならば、「五カ国共同書簡」「二千語宣言批判」といった文書を実際に読み、それが武力介入という行為を科学的、哲学的、かつ倫理的に正当化する機能をいかに見事に果たしえたかをみるだけでも充分である。だが、一神教的世界は東だけの現実であろうか。いやそうではあるまい。そこにはまた別の種類の一神教が君臨している。それは究極的には、西の巨大なレバイアサン（国家）たちの、なかんずくアメリカというそれの保有する核を神格とする一神教世界である。その傘におおわれた殿堂のもとで、この想像を絶する大きな破壊力を秘めた物神に仕える必要悪として、政治権力が正当化されるのである。 つまり、東の核が神聖な権力に仕える必要悪であるのとちょうどうらはらの関係で、西の権力が神聖な核に仕えるのである。だから、これら二つの一神教世界は、チェコ事件においても想像されるように、一点において鎖を連ねて現代の地球をおおいつくすのである。

「存在するものはすべて理性的である」にならっていえば、東においては「善なるものは存在すべきである」という概念による秩序、西においては「存在せざるをえぬものは善と見なされるべきである」という事物による秩序――そしてこれら二つの命題に示される精神構造は、西においても東においても「相互浸透」しあって二つながらに共存している。それが、現代における一神教的円環構造の提供する意味論的文脈である。

しかしながら、個としての肉体と魂そのものにおいて引き裂かれ、あるいは刺しつらぬかれて死んだものにとってのそのことの意味とは、もっと端的で単純なものであったのではないだろうか。だから、もはやひとたび死んだチェコにとっての事件の意味とは、あの八月を境とするはじめの七ヶ月間と、それ以後との比較によっておそらく直ちに実感されるものであるのにちがいない。

さきにのべた、その実はなはだしい意味上の混乱をはらんだ一神教的文脈と、そのただなかにおける、あまりにも明瞭な受難者としての意味との苛酷な対照をみるならば、チェコ事件の問いかけたものが「受刑者としてでも、処刑者としてでもなく」人間が生存することが、現代においてできるのかどうかということであったといっても、お

そらく理解されるにちがいない。

（六）

いわゆる「二千語宣言」に対する多様な「評価」ほど、スターリン主義的体制への人間の拒否反応にうらづけられた上記のような問いかけが許容される可能性が、こんにちすくないことをうきぼりにしたものはなかった。それらは、反革命文書、右翼社会民主主義思想、一定の評価はできるが危険なリベラリズムを蔵している、そして歓迎すべき自由主義への信仰告白、などであった。しかし、作家同盟機関紙、青年同盟機関紙、全国労働組合機関紙、農民新聞の四紙に発表されたこの文書は、チェコ事件の意味論にとっては基本的な重要性をもっている。それが直接には一月以降の作家同盟、ジャーナリスト会議等の活動のなかから生みだされたものであることは、おそらくまちがいない。しかし、上記のような問いかけに照らしていえば、それはもっと普遍的な意味をもつというべきだろう。それはまた、政治の領域に向かって発せられたチェコ事件のことばの集成でもある。

文章そのものは引用しないが、この文書がある種の人々を不快に、あるいは不安に刺激したのは、それが党および政府の果たしうる機能を肯定しながらも、それらが過去二〇年間の歴史への拒絶を込めたこの問いかけ、この目的に奉仕するかぎりでの条件付支持を明言したという点にあるのではないか。（人間の政治権力に対する支持に、条件付以外のものが本当はありえようか。）そうであるとするならば、こうした価値逆転をチェコの言葉が、この一神教世界のなかで許容される可能性はもともと極めて小さかったのだ。逆説としていうならば、一月以後改革されたチェコの党とドプチェク政権のおかした唯一の罪は、この文書を起草者と署名者共々葬り去ってしまわなかったことにある。

現代における核と権力とイデオロギーの動きのつかない三位一体の秩序のもとで、そのもとでおこらざるとえなかったが故にこそ、ことばと武器との、象徴的なものと物象的なものとの対抗というユニークな性格をきわだたせることになったこの事件において、チェコはこの象徴的なものにこめられた肉感に執着しつづけたという理由によ

って、政治的に敗れたのである。目下のところは、それを死に至らしめるために、史上最大の政治権力の一つをもってして足かけ三年を要したということを指摘する以外にはなにもコメントすることはない。

「※」印部分は、『戦車と自由――チェコスロバキア事件資料集』（1970、みすず書房）による。